

大韓航空機爆破事件に学ぶリスクマネジメント再考（レジュメ）

はじめに

リスクマネジメントとは、一言でいえば基本の遵守であると言っても過言ではない。しかし、基本を順守することは、簡単なようで実は難しい。基本を如何に守らせるか、如何に徹底させかが上に立つ者のリスクマネジメント（職責）である。

大韓航空機爆破事件は、大韓航空機搭乗前の手荷物検査が基本通りになされておれば、乗員乗客 115 人全員が犠牲となった事件の発生は防げた。

1 大韓航空機爆破事件の概要

1987年11月28日午後11時45分にイラクのバグダッド空港を飛び立った大韓航空機 KE858 便は、経由地であるアラブ首長国連邦（UAE）のアブダビ空港に立ち寄り、韓国ソウル金浦空港に向かった。しかし、インド洋上（アンダマン海域）で爆破され、乗員乗客 115 人（乗員 11 名）全員が犠牲となった。

本事件は日本人親子（パスポート名蜂谷真一、蜂谷真由美）に成りすました北朝鮮工作員金勝一（69歳）と金賢姫（25歳）が時限爆弾を機内にセットし、自分たちはアブダビ（アラブ首長国連邦）で降りている、

2 女性工作員の選定と訓練

金賢姫（キム・ヒョンヒ）は1980年3月のある日、当時大学2年生（平壤外国語大学日本語学科）であったが、突然北朝鮮労働党調査部の工作員に選定された。以後招待所等において工作員としての訓練が行われた。その際に日本語と日本人化教育の指導に当たったのが李恩恵（リ・ウネ）という女性であり、招待所に同居し、日本語の勉強だけでなく、日本人としての立ち振る舞いなども指導された。李恩恵は、後で拉致被害者の一人である田口八重子さんと判明した。

3 任務付与と覚悟の署名

(1) 与えられた任務

金賢姫は、北朝鮮当局の指示で1987年10月27日、熟練工作員の金勝一と初めて合流し、李情報調査部長から任務が付与された。それは、「1988年のソウルオリンピックを阻止せよ。そのために南朝鮮の飛行機を消せ。」というものであった。

(2) 覚悟の署名

平壤出発 1 週間前、二人の工作人員に対して、任務が失敗した時に覚悟の自殺をするため、毒薬のアンプルが入ったタバコ（米国製マールボロ）2 箱が手渡された。

更に 11 月 12 日出発当日の朝、金勝一と金賢姫の二人は、任務完遂宣誓文に連名で署名、指印した。

4 北朝鮮出国後の経路

(1) 1987 年 11 月 12 日、平壤を朝鮮航空機で出国し、翌日 1 3 日ソ連のモスクワへ入国した。この際には指導員 2 名が同道している。

(2) 11 月 14 日にモスクワを飛び立ち、ハンガリーのブダペストへソ連のアエロフロート機で入国した。ここまでは北朝鮮の公用旅券を使用し、次の訪問国オーストリアから日本旅券を使用している。

(3) 11 月 18 日ブダペストからは陸路（北朝鮮大使館員が運転するベント）でオーストリアのウィーンへ入国し、5 日間滞在する。ウィーンでは日本人親子を装い観光する。そして観光中に次の日程の航空券を購入し、予約した。

- ① 11/23 14:25 ウィーン発ベオグラード行オーストリア航空 OS831 便
- ② 11/28 14:30 ベオグラード発バクダッド行イラク航空 LA226 便
- ③ 11/28 23:45 バクダッド発アブダビ行大韓航空 KE858 便
- ④ 11/29 14:45 アブダビ発バーレーン行ガルフ航空 GF353 便

- 上記航空券以外に逃亡用としてアブダビ発アンマン（ヨルダン）経由ローマ行の航空券も購入し、予約した。

5 ベオグラード空港とバクダッド空港での手荷物検査

ベオグラード出発前日、滞在先のメトロポールホテルにおいて、別行動でついて来た北朝鮮の指導員からショッピングバッグを受け取る。中には爆発物が入れられていた。表面的には日本製トランジスタラジオ 1 台（パナソニック製モデル番号 RF082）と薬用酒の瓶（液体爆薬）である。

- 時限爆破装置は、電池がなければ作動できない構造になっている。

(1) ベオグラード空港での手荷物検査対応

この空港では、イラクのバグダッドに向かうため、所定の手荷物検査とイラク航空機に搭乗するための手続きをした。更に搭乗口には軍服を着たイラク航空機の男女乗務員が立ち、再度念入りな所持品検査を行った。女性乗務員が旅行鞆とショッピングバッグをひっくり返し、トランジスターラジオから電池4個を取り出した。

「機内にはどのような電池も持ち込み禁止である。電池は預かり、飛行機を降りる際に返します。」と取り上げられた。極めて基本に忠実な行動である。

イラク航空機 (LA226 便) は 11 月 28 日午後 2 時 30 分ベオグラードを出発し、その後バグダッドに着陸したので二人は航空機を降りる。

そして取り上げられて保管されていた電池は、航空機を降りる際に返された。

(2) バグダッド空港での手荷物検査対応

バグダッドに到着した後、大韓航空機に乗り込む前に荷物と身体検査が行われた。女性検査官は「この空港では絶対に電池を機内に持ち込めない。」と言って電池を取り上げた。金賢姫は必死に哀願して電池を返してくれるように頼む。

電池を取り上げられたら任務を完遂できないので命がけであった。女性検査官は電池ぐらいでなぜ執拗に哀願するのか変に思ったであろう。父親役の金勝一が検査を終え金賢姫のもとに帰って来たので経緯を報告した。金勝一も加勢し抗議してきたので女性検査官はしびれを切らし、検査官室前のごみ箱に電池を投げ込んでしまった。

金賢姫はすぐにごみ箱に行き、電池を拾い上げ、金勝一に手渡した。金勝一はラジオに電池を入れ、ラジオをつけて音が鳴るのを確認した後、ただのラジオ用の電池であると検査官に抗議した。この時男性検査官は「女性検査官は規則通りにしようとしてあんな態度をした。」と親子に同情的に接した。その後、二人の検査官は、電池を入れたラジオを持っていくのを黙認してしまった。

6 国際テロの実行

金勝一は大韓航空機に搭乗 20 分前頃、ラジオを出して電池を入れ、9 時間後に爆発するようにアラームスイッチを合わせた。遂に工作員の金勝一は航空機爆破計画の最終手順を実行した。

この手順を終えたことで、金勝一は緊張と疲労感で待ち合わせ室の椅子から立ち上がれなかった。そこで日本製の「救心」を口に入れてから大韓航空機に搭乗した。

金勝一は旅行用カバンとショッピングバッグを座席上の棚に載せ、航空機は定時に飛び立った。

7 アブダビ空港（ア首連）での想定外の出来事（逃亡計画の失敗）

(1) 11月29日午前2時50分、アブダビ空港に着き、大韓航空機を降りると空港職員が乗り換えの乗客から航空券と旅券を集めに来たので、バーレーン行きの航空券を渡してしまう。計画では、二人はアブダビからアンマン（ヨルダン）へ飛び、さらにローマ、ウィーン経由で北朝鮮に逃亡することになっていた。

しかし、空港職員の誘導に従って同日の午前9時アブダビ発バーレーンへ行くことになる。

(2) アブダビからバーレーンには1時間で着き、マナーマホテルで滞在する。滞在中に翌日（11月30日）のローマ行の当日券を求めたが、満席のため、翌々日の12月1日午前8時30分発のローマ行を予約した。この時間的ロスにより二人は当局に捕捉されることとなる。二人は自殺を執行し、金勝一は即死したが、金賢姫は命を取り留めた。

終わりに

大韓航空機爆破事件は、その後韓国の捜査により、北朝鮮工作員による国際テロ事件であると解明された。またこのテロ事件捜査を通じて、一連の北朝鮮による日本人拉致事件との関係が明らかになってきたのである。

金賢姫（キム・ヒョンヒ）は手記の最後に「空港検査官は、なぜあのときちゃんと職責を果たさなかったのか、果たして居れば115人の犠牲はなかった。自分も死刑判決を受け、苦しい思いをしなくてよかった。」と記している。

一

参考文献

「金賢姫全告白 いま、女として 上下」 金賢姫 著・池田菊敏 訳

（村上昭徳 元大阪府警、企業危機管理士）